

進達の子

東天紅

鶏が鳴く。

夜は明けはじめた。

暗影を破つて

聖き光

天地に充つ。

財界大不景気、人心悪化、議会の大混乱騒ぎ、暗雲低迷……あらゆる暗い言葉が日本の現状を表現した。我らはこうした灰色な日本の現状のままに年を送つて兎にも角にもこゝに昭和三年の新春を迎えた。

去年の十二月二十五日をもつて諒闇は明けた。本年は、聖上陛下が御即位の大典を挙げさせたもう年である。普選による国会議員の選挙も今年行われる。

我が光明団が十周年を迎えるのも今年である。

何時覚めてもいい。しかし我らは凡人である。凡人なるが故にこうした新年に考えよう。

仕事が終わるから元日を待つ人もあろう。着物を着飾ることの嬉しい女もあろう。しかしそれで新年の意義があるだろうか。風呂にはいつても心が新になる。学期が変わつても心が新になる。部屋を掃除しても心が新になる。まして年が変わるのだ。心が新になるのは当然のことだ。心を新にせよ。新しく自分の進むべき道が見える。

年に合わせて運勢判断の書物を見ている者がある。本年の吉凶を何でもないえとのまはり合わせで知ろうというのである。本年は大吉とあれば樂觀し、凶とあれば悲観する。こうした人はかなり多い。それらは大概幽霊の群である。

我が運命を支配する者は我である。独立者としての我らは、何ものの神に功利的の祈願もせず、何ものゝ恩恵もしりぞけて、まず大地の上に素手で立とう。

しっかりと大地をふみしめ、手を高く天上に伸ばせ、そうして深呼吸をせよ。そうして一歩づつ力強く歩け。我を支配する者は我である。

失望

進達の子よ！

汝の行手には種々様々の悪魔が表われる。お前の後にはこの悪魔が何時もつきまとうている。

お前が一寸でも弱った時、

「私はこのまゝでやりきれぬか知らず？」
「いつそのことやめてしまおうかしら。」

あまりにもせつぱつまったのに驚いて、一生に一度位は、死んだ方がましだと考えることがあるかも知れぬ。

見よ！ そこには失望の悪魔が汝を占領しつくしている。全て悪魔が勝利者になつている時、悪魔の姿は見えない。

失望の犠牲にするな、どんな時にも失望すな。

行きづまった時、そこでじつと目をつぶれ。堅く腕をくめ。一步も後へひくな。信ずる人があつたら激励してもらえ。そうしてじつと考えよ。わかつて来たら進め。

汝の道は汝の心の目にしか見えない。

形は道ではない。道は汝のその胸底から開く。

今の汝さえ知らぬその道が他の誰にわかろうぞ。

しかしいかなる時、いかなる場合にも道がある。

それだけ信ぜられたら、安価に誰でも頼つてはならぬ。

これでも行かれようかと思われる時、失望の悪魔には目もくれずに、とにかく、衷心の願求の世界に一步を踏み出して見よ。そこには温い手が待っている。

衷心の願求の上を走る者には、よし形の上は失敗しても、求めたものか、あるいはそれ以上のものが得られる。

「人生に袋町なし。」

計画に囚われるな、はからいに陥るな、形だけを眼中におくな。

それよりも失望の悪魔のとりことならず、衷心の生命に力強い信の炎をもやせ。

悲観

地上には一人も完全な人はいない。誰の上にも失敗がある。

失敗すると世の中から笑われる。嘲笑されると悲観する。

善人も嘲笑され、悪人も嘲笑される。

一度や二度失敗があつても決して悲観するな。

嘲笑されても、悪罵されても、悲観する心をはらいのけて立ちあがれ。

弱くちやいけない。

登れば登るだけ、坂はけわしくなる。

高くなればなるだけ、強い風が当たる。

汝にはそれにたえるだけの力があるはずだ。

あらぬ誤解を受けるかも知れぬ。

大きな声で弁解するより、黙つて汝は汝の世界に精進せよ。

時は有力なる解決者である。

他人に認めてもらおうとする度が高くなればなるだけ、汝には悲観の度が増す。

人生は自己を真に実現してゆく道場である。他人に認めてもらうために生きていくのではない。

深山の奥に、あれを見よ、人が見んのに花が咲く。何時太陽に不公平があつたか。

しかし、名利の心は、一生汝をはなれぬしつこい悪魔である。昔の聖者はこの心を抱いて泣いた。

いかに離れぬからとて、この悪魔に汝自身を占領されてはならぬ。名利心のとりことなつた時、汝は高慢と悲観の暗黒界から出でられぬ。

悲観すな、どんな重荷がまかれて来ても、につこと笑つて背負つてゆけ。

汝が如何にもがいても、汝のものは汝をはなれぬ。

弱い女の身空で、一家数人を養わねばならぬかも知れぬ。

弱い者でも強くなる。立つて泣いているより忠実に働け。

汝を生かすも殺すも、汝の態度一つにある。正宗の名剣は高等工業の講義からは生れない。

赤い／＼火の中から、出してはたゝかれて出来る。

真の力は、汝自身を抱いて、苦しんだ中から生れる。

心を養え、道が明らかになる。

悲観は二つも三つも道を持つ者にだけある。

真の智慧は何時もたつた一本の道を示す。

ふまれても、たたかれても、罵倒されても、いいと信じた一本道を、悲観せずに進んでゆけ。

その時／＼の風の吹きまわしによつて、ふらく／＼と動いていたら、やがて大きな悲観が見舞うて来る。

自分の道を持たぬ者は、ちよつとした風によつても動いてしまう。

汝がもし人であるなら、何ものにも動かぬ世界を持つて。

しかし、それは決して堅くなることではない、強情あきらかばることではない。

自分の道を諦あきらかに見よ。よく悲観から遠ざかる。

精進

進達の子よ。

忍受なき者に真の精進なし。精進なき者に真の忍受なし。

なまけるな、怠るな、忍受も精進もないならば、汝には光明も信念も失せたのだ。

偉人という偉人、聖者という聖者、いいえ我は成功熱をおおるのではない、しかしなまけて一人の偉人が生れたか、聖者が出でたか。

努力せよ！ 精進せよ。

全ての人に一年は三石六十五日、一日は二十四時間である。

必ずこれを成就せねばという誓願の甲を被れ。不断の智慧の剣をとれ！

血と肉を捧げよ、一切の所有を公にうつせ。公なるものと思う時、働いても／＼つきせぬ光の広野が開ける。

精進する者だけが忍ばれる。忍ぶ者だけ汝の内部が充実する。内部の充実は力となる。象王の如く静かに、至善の彼岸に行歩をむけよ。

働け！ 働け！ 規律正しく働け。働く者だけ血の色が増す。働かず、つとめずして、結果だけを求めはしなかつたか。

精進なき信仰、精進なき道德、精進なき理論、それらは全て一片の空論である。一切の哲学、一切の宗教、一切の倫理、それは正しき行の根底である。行とは人格実現の具体的事実である。精進とは人格の実現そのもの、別名である。いかなる結果を得たか、問題であるよりは、如何に精進したか、努力したか、問題である。

我らはその動機と、道程とを尊重する。

我らが現実の批判の光を至善の彼岸に求めよ。彼岸は我らを招喚する。

道草をやめて、彼岸を目ざせ、一切にこだわるな。

一切は「そらごとたはごと」である。

我らの思惟以前の世界にかえれ、純粹なる意志が我らを渡す大船となつて彼岸に動く。善悪を越え、分別を超え、興亡を超え、生死を超え、能不能をこえて、この本願力が我らを彼岸に運ぶ。

彼は「仮令身を諸の苦毒の中におくとも我が行は精進にして忍んで終に悔いじ」と叫ぶ。

この力の体解を我らは信仰とよぶ。眞実の国へは、解怠の者は入りがたい。汝、大心力に帰命せよ。永遠の精進がこゝにある。

忍力成就

進達の子よ。

充された者に創造はあり得ない。

単なる感激をひき破れ、美しい夢の化城をふき消せよ。

永遠の生命の創造とは、古いものの再現ではない。前人の足跡の単なる模写ではあり待ない。

現在に充たざる不断の欲求、然り、無限にのびんとする無限の欲求、それが生命それ自身ではないか。

この盲目的な生命の本流を、地上のあらゆる制約が抑圧しようとする。

夏は暑く、冬は寒い。

国家には法律があり、社会には習慣と因襲がある。

肉体を持つ故に衣食住の問題が横たわる。

今や我らの大部分は生活難の大問題に苦しめられる。

陥れようとする穴があれば、批難攻撃の銃剣がむかう。

こうした外からのあらゆる抑圧が我らの生命という船のへさきとぶちあう。

更に我らは鑄型主義の教育によつて数多の学問を頭の中に入れた。

理論、哲学、道德、あらゆる概念がこの生命の前をふさぐ。

かくて我らは内と外とに大きなく抑圧を感じる。

そこに我らは苦悩を感じる。

あゝ悩み多き大地よ。

「否」と答える。

人生の深い幸福と、おもしろきは、実にこの限りなき苦悩の所産である。地上に生甲斐あるは苦あるがためである。

限りなき生命の進展を知らず、大いなるものの権威に盲従し、長い因襲にひきずられ、利害の打算にのみ賢くて、妥協又妥協を事とする、弱き善人と、ずるい賢者に、かくの如き苦悩があり得ようか。

燃ゆる生命！

その生命が他の全くちがった障碍物に衝突する。そこに苦悩が生れる。

しかし、そこには、自動車のヘッドライトのように「光」を産み出す。この光が我らの行手を照らす。

理想、彼岸、浄土……美しい詩も、崇高なる宗教も、ここから生れる、この光の中に一切人の苦悩が見える。社会が見える。偉大なる宗教家はこの光の中に一切衆生すら内観した。この光こそ智慧である。

眠れる魂よさめよ。そうしてより深い苦悩を引き出だせ。一切同胞よ。御身が持つ一切苦悩の生活相は、全て我が内に永遠に潜在し、所有しつつも、我によつて未だ知られざる心の痛みにすぎないではないか。苦悩に根ざさない芸術でも道徳でも宗教でもがあるならばそれは生命のない玩具である。

湿った泥のない所に白蓮華はない。苦悩のない所に生命の創造はない。我らはかくて苦悩の真意義にふれた。

苦悩に根ざした、生命創造には二つの相をもつ。その一つはすでに述べた精進である。そうしてその一つの相は「忍」である。

もし人生が無障碍で、不自由に裏づけられない自由があるならば、それはもはや自由ではあり得ない。

水のない河に橋はなく、高低のない平原に道はいらない。

道は実に不自由が作る。

そうして道は外的なものでなく、「道は人である。」

苦悩より生命が自由へと動く所に道がある。

だから道とは生命創造それ自身のすがたである。

精進と忍受、それは決して二つではない。一つのものゝ両面である。

忍受なしの精進がどこにあるう。

精進するには力がある。

忍ぶのにも力がある。

心の中に二つの力はない。忍ぶ力が精進する力である。

「忍力成就して衆苦をはからず。少欲知足にして染患痴なし。三昧常寂にして智慧無碍なり。」(大無量寿経)

とは無量寿仏を成就するため永劫修行をはたした無量寿法蔵菩薩の本願成就のすがたであった。

忍受は大消極の相であり、精進は大積極の相である。しかし消極の忍受が、大積極の精進に一致する所にだけ、真の生活がある。

進達の子よ！

一切の苦悩を忍受せよ。

苦悩を逃避しようとする時、汝の目は曇つたのだ。

美しい妥協の魔宮にとゞまるな、功利的一切の神々とおいとませよ、迷信の横道にそれるな、人々の賞讃に耳をかすな、人々の悪口を大胆にいだきしめよ、安価なる平和に腰かけるな、単なる感情に支配されるな、一切の偶像の奴隷となるな。

汝の衷心の願望は、一切のはからいの棄つた天地に輝く。
たて、そうして忍べ。

忍力成就……それば生きることの根底である。

眞実のくにへ

進達の子よ！

進め、一切を超えて進め、汝の衷心の願求にたつて雄々しく進出せよ。

愚なる民衆は、たとえ汝の足跡が人類に大きな恩恵を与えるものであつても、汝を敵として剣をむけるかも知れぬ。

民衆が深き眠りに入つた時、阿片の中毒にかかつた者が毒薬を更に求めている時、因襲の毒酒に酔いしれた時、そこには何時もこうした世界から、彼自身が覚めて立つた先駆者がいた。しかしそこに愚なる民衆は、彼を狂者とよび、異端者と罵り、人類の敵として刃をむけた。

皆が黙する時 独り叫び

皆が眠る時 独りさめ

皆が信ずる時 独り疑い

皆が座つた時 独り進む

もしそれが、時代の欠陥に一步でもふれているならば、もし眞実性が一分でも多いならば、必ずそこには、迫害の剣を覚悟せねばならぬ。

進達の子よ、農村にも出でよ、都会にも出でよ、工場にも出でよ、学校にも出でよ。

ローマの栄華の日々の歓楽の裏には、滅亡の青い悪魔が待っている。

栄華の耽美者となるなかれ。小さき安全に宿かるなかれ。山中の聖座に逃避するなかれ。

刃もいとわず。波濤もおおそれず。眞実の国に歩みを運べ。永遠の彼方から我汝を護るとよぶ。

一切の聖者、哲人がこの眞実の招喚の声に如何に忠実であつたか。

眞理に忠実なれ。虚偽をいとえ。

虚偽の生活に平安はない。我と我が心を偽る者には眞実の国への道はふさがる。

汝について来る民衆の数を眼中におくな。形の上の成功に囚われるな。大道芸人も見物人は集る。

独りで考え、独りでたち、独りで歩め。

安価な同情の衣にかくれるな。慰めらるるよりも慰めよ。

大衆と迎合する時、汝の全ては腐れはじめ。唯一の道を求め、唯一の招喚を聞き、唯一の道を進め。

まなべ

進達の子よ。さはいうものの、汝は単なる盲進の猪武者であつてはならない。

時代を知れ。民衆の声を聞け。汝は学ばねばならぬ。

知らぬこと、無智であることは時には罪惡である。無学であることは汝自身の恥辱である。

汝の思うこと、汝の言うこと、汝の行うことが高い世界にふれようとし、汝が独立の行歩を至善の世界に運ぼうとし、汝の一生を価値あるものに成就しようとし、汝の全体を人生の大河に生かそうとするならば、汝は心の糧を不断にとらねばならぬ。

学ばざる聖者はなく、無学なる先駆者はない。単なる独断は一人よがりである。学べ！毎日学べ、燃えたる火には不断に薪をなげこまねばならぬ。生命の火に、信念の火に、不断に新らしき薪をなげ入れよ。

一切衆生の苦悩のうめきを聞き得る菩薩の耳のみが、又よく一切諸仏の経説を聞く。聞いた程度に耳が開け、見た程度に眼が開ける。民衆の苦悩に耳をかさない学者は、時代に不用な骨董である。

若き進達の子よ、汝は今まだ出発したばかりである。あの開けた広い曠野を見よ、進達の太鼓の音高く。

失望するな。悲観するな。精進せよ、進達せよ。

眞実へ通ずる一本道が見はつたら何時でも見える。